

## 堺市立中央図書館所蔵芝居番付考

斉藤利彦

### はじめに

大阪府堺市は中世以来の歴史と伝統をもつ、全国でも有数の都市のひとつである。そのため、都市「堺」に関する学術研究は、早くから考古学・歴史学・国文学などの多岐にわたる諸分野よりなされてきた。<sup>(1)</sup> 歴史学・国文学などの学問分野では、研究を進めていくうえで資史料が基本となるのは言うまでもない。では堺市の場合、どのような史料が存在するのであるつか。都市「堺」の歴史研究を行っていくうえで根本史料といえは、やはり堺市立中央図書館（以下、中央図書館と略）が所蔵されている『堺市史史料』一四五冊であるといえよう。

この『堺市史史料』とは、堺市が大正一三年（一九二四）から昭和五年（一九三〇）にかけて『堺市史』を編纂するにあたり、堺市の「旧市史編纂部」が収集された史料を筆耕した史料筆耕集である。<sup>(2)</sup> 堺市は太平洋戦争により当時の市域が戦災にあい、貴重な資史料も焼失、あるいは散逸してしまふ。戦災により、市域の大部分の貴重な資史料を失った堺市にとっては、史料の筆耕集とはいえず、『堺市史史料』は堺市の歴史を考察するうえで貴重な存在であり、したがって堺研究における根本史料といえるのである。

しかし、この『堺市史史料』はあくまでも市史編纂のために収集した史料の筆耕集であるため、所収されている筆耕

史料を用いて研究を行なう場合、その取り扱いには慎重になされなければならない。

近年、中央図書館は所蔵されている古文書の整理調査事業を推進されている。堺研究における史料問題を克服しようとする動きとして注目できる。整理対象の所蔵史料の多くは、昭和六年以降、「旧市史編纂部」より中央図書館に引き継がれたもの、あるいは中央図書館が古書店などから購入したものである。その史料の大半は『堺市史料』に筆耕されていない史料であり、これまで未紹介のものである。

ところで、この古文書整理事業における整理史料のなかに、合綴して冊子状にまとめられた江戸時代の歌舞伎などの芝居番付が伝存している。近年、芝居番付所蔵各機関では芝居番付の整理、目録化が進められており、番付史料に関しても豊富な研究蓄積を有するようになって<sup>3)</sup>いる。他の芝居番付所蔵機関の所蔵枚数からいえば、中央図書館が所蔵する芝居番付の量は微々たるものである。しかし、その来歴や番付から汲み取れる情報を整理し考察することは、堺のもつ史料伝存状況からみても意味がないものではないであろう。

かつて、筆者はこの芝居番付の概要を『堺研究』三〇号で報告した。あくまでも概要ということもあって、紙幅の制約があり、十分に言及できない点もあった。またその後の調査により、新たに判明した点、若干の訂正を加える点もできた。

そこで、本稿は中央図書館が所蔵される芝居番付について、その来歴やそこから汲み取れる情報を整理、検討していきたい。

## 一 中央図書館所蔵芝居番付とその現状について

中央図書館蔵の芝居番付が現在、どのような内訳であり、どのような現状であるのか。まず、この点について確認しておきたい。というのも、この番付の伝存の現状を確認しておくことは、この芝居番付の伝来などを考察するうえで有意義なことであると考えるからである。

中央図書館蔵の芝居番付は「中村富十郎在堺当時芝居番付外一種」(以下、「富十郎番付」と略)と墨書した白厚紙の表紙(裏表紙も白厚紙)を用いて、つぎのような芝居番付を合綴している。

別表紙(無題)で綴じ直し冊子状となっている断簡絵尽一冊。

反古紙で裏打ちされた役割番付二二枚。

巻末の【目録】は「富十郎番付」の具体的内容を整理し目録としたものである。その内訳を簡単にふれると、a)断簡で後世に別表紙で綴じ直された寛保元年(一七四一)二月大坂大西芝居「女人堂きさらぎ桜」絵尽一冊、b)新地南芝居歌舞伎芝居役割番付一六枚、c)新地南芝居浄瑠璃役割番付一枚(ただし新地南芝居と推考される)、d)新地北芝居歌舞伎芝居番付一枚、e)新地北芝居浄瑠璃番付一枚、f)堺南嶋芝居俄狂言番付一枚(ただし新地南芝居と推考される)、g)堺芝居俄狂言番付一枚、h)大坂道頓堀中之芝居(中座)役割番付一枚、計二冊二枚、二三点より構成されている。

つぎに、それぞれの現状の詳細について検討してみたい。まず、a)の断簡絵尽是、もともとこの絵尽の三・四・五・六・七・八・九丁が伝存し綴じられている。このうち九丁オモテ・ウラは裁断され、それぞれ二つ折りにした白紙の和紙のウラに九丁オモテを、もう一枚の二つ折りにした白紙の和紙のオモテに九丁ウラが張り付けられている。そして、

二つ折りにした白紙の和紙のオモチに張り付けされた九丁ウラを三丁の前に配し、二つ折りにした白紙の和紙のウラに張り付けされた九丁オモチを八丁の後ろに配し、別の表紙で綴じ直している。つまり綴じられた丁の順序は、九丁ウラ・三・四・五・六・七・八・九丁オモチとなっているのである。また、裏表紙見返しをみると、「天保一四年 金田丁播磨屋十兵衛」と墨書されており、もともとの持ち主であったものと考えられる。この絵巻は、先述したように寛保元年二月大坂大西芝居の興行のものである。その絵巻に手を加え綴じ直した裏表紙見返しに、「天保一四年」とあることから、綴じ直された時期について、天保一四年をひとつあげることができよう。

一方、(b)から(h)の役割番付は二枚それぞれが反古紙で裏打ちされ、二つ折りにされ袋綴りにして合綴している。本史料の中核となる(b)一六点のうち、二二点が新地南芝居における二代目中村富十郎出勤時の役割番付である。「中村富十郎在堺当時芝居番付外一種」という表題の由来はこのあたりにあるのである。両者ともに保存状況は悪くはなく、破損その他に関しては目立ったものはない。

平成二二年(二〇〇〇)に行われた調査の際、綴紐(たこ糸)をほどこき、一旦、現状をばらしたうえで絵巻一冊・役割番付二枚それぞれ一点づつに仮番号が付されたうえで、仮目録がとられた。そのため現在は一点ごとに仮番号が付されたうえで整理封筒に入れられ保管されている。後述するがその際、「富十郎番付」は「堺芝居番付」と改題された(筆者はこの調査には参加せず)。

では、いつの段階で断簡の絵巻は手を加えられ構成し直され、役割番付はいつ頃、反古紙で裏打ちされたのであろうか。そして、いつの段階でどのような理由により、このような冊子体になったのであろうか。これらの問題を明らかにすることは、「富十郎番付」の出所や来歴を考察するうえから重要な課題といえる。そこでつきに、「富十郎番付」の出所や来歴などを検証していきたい。

## 二 中央図書館所蔵芝居番付の来歴

### 1 「旧市史編集部」と「堺芝居番付」購入

堺市では大正一三年から昭和五年にかけて『堺市史』が編纂された。この編纂のおり、綿密な史料調査が行われた。その際、「旧市史編集部」が収集した史料を筆耕したのが、先述した『堺市史史料』であった。市史編纂終了後は、中央図書館が『堺市史史料』と史料調査記録である『史料採訪目録』を引き継いでいる。また「旧市史編集部」は古書店などから購入したり、あるいは個人などから寄贈を受けたりして史料の収集にも努めている。さらに、市の他局や他課より引き継いだ関連書類、市史編纂にあたり関連する図書文献なども市史編纂資料として収集している。これらの資料は『書籍台帳』に記載されている。この『書籍台帳』そのものと『書籍台帳』に記載されている収集した資料も中央図書館に引き継がれている。ただし、この『書籍台帳』の記載内容を検討すると、とくに「旧市史編集部」が購入・寄贈・引継などで収集した資料全てが記載されているわけではないようである。

さて、この『書籍台帳』をみると、「旧市史編集部」は昭和三年九月三日、つぎのような二点の史料を、それぞれ三円で購入していることが判明する。

「三芝居起立書」写本

「堺芝居番付」二二枚

これらの二点の史料をどこから購入したかについては、残念ながら記載されていない。おそらく、『堺市史』編纂時に編纂史料とするために古書店か、あるいは個人から購入したのではないかと考えられる。具体的には『堺市史』第三巻の編纂史料としようとしたのである。では、これらの二点の史料は、中央図書館に引き継がれたのであろうか。

このうちについては、現在、貴重和本として登録されている。閲覧すると、内容は享保期の江戸三座に関する写本であり、おそらく旧幕府引継書の類の写本ではないかと推考される。

の「堺芝居番付」二二枚については、貴重和本の目録や図書館の図書カードなどをみても登録されていない。また『書籍台帳』には「堺芝居番付」と記載されているのみで、どのような芝居番付であったのか、すなわち番付（顔見世番付）・役割番付・絵尽のいずれであったのか、判然とはしない。

ただ『書籍台帳』より、「旧市史編纂部」は、「堺芝居番付」と題する芝居番付を二枚購入していることはわかる。ここで注目したいのは、い未問題として、「富十郎番付」で合綴されている役割番付の枚数も二枚であり、「堺芝居番付」と同枚数であるという点である。さらに、「富十郎番付」で合綴されている役割番付二枚には、一枚ごとに「旧市史編纂部」の判が押されている。これらの点と購入時期なども勘案すると、「旧市史編纂部」が昭和三年九月三日、三円で購入した「堺芝居番付」二二枚と、「富十郎番付」で合綴されている役割番付二二枚とは同一の番付であると考えられる。したがって、「富十郎番付」で合綴されている役割番付は、もともと「旧市史編纂部」が昭和三年九月三日に三円で購入したものであったと考えられる。「旧市史編纂部」が購入した「堺芝居番付」は、いつの段階かは不明であるが、「中村富十郎在堺当時芝居番付外一種」として合綴されたため、「堺芝居番付」としては貴重和本の目録、あるいは図書館の図書カードには登録されなかったと考えてよいであろう。

となると、ここで注目したいのが、役割番付と一緒に合綴されている断簡絵尽一冊である。先述した『書籍台帳』をみると、「堺芝居番付」二二枚と記載されている。つまり「旧市史編纂部」はあくまで役割番付を購入したのであり、断簡絵尽は同時に購入していないことは、はっきりとする。さらに『書籍台帳』には断簡絵尽に関する記載はない。しかし断簡絵尽にも「旧市史編纂部」の判が押されているので、時期は不明であるが、何かしらの経緯で、「旧市史編纂部」が所有するようになったものと考えられる。この「女人堂きさらぎ桜」は、堺の乳守郭が舞台となっている歌舞伎狂言である。そのため、「旧市史編纂部」はこの絵尽を収集したものと考えられる。これらのことから、役割番付二二枚と断簡絵尽は、「旧市史編纂部」には別々の時期に入ったものと考えられる。そのため、出所も別々の可能性が高い（後述するが絵尽は大坂町人、役割番付は堺町人の所有であったのではないかと推考される点がある）。

このように「富十郎番付」は、当初からこのような表題がつけられ、役割番付と断簡絵尽が合綴されていたのではないことが判明する。「富十郎番付」で合綴されている役割番付二二枚は、もともとは「旧市史編纂部」が昭和三年九月三日、三円で購入したものであり、断簡絵尽は時期は不明であるが、何かしらの経緯により「旧市史編纂部」が所有するようになったものと考えられる。つまり、別々に「旧市史編纂部」にはいった二点の芝居番付が、のちに合綴されたうえで「中村富十郎在堺当時芝居番付外一種」といった表題をつけられたものと考えられる。

それでは、いつの段階で現状のような合綴の冊子体となり、さらに「中村富十郎在堺当時芝居番付外一種」と表題がつけられたのであろうか。

## 2 中央図書館による受入整理と「富十郎番付」

先述したように、昭和五年、『堺市史』の編纂は終了した。同六年以降、『堺市史史料』や『史料探訪目録』、『書籍台帳』、そして「旧市史編纂部」が収集した資史料や図書文献などは中央図書館へ引き継がれた。中央図書館は昭和十三年（一九三八）から同一四年（一九三九）にかけて、「旧市史編纂部」より引き継いだ資史料の受入整理を行い、図書登録と図書カードなどが作成されていた。

「富十郎番付」をみると、表紙に当時の中央図書館の「古文書分類表」による分類番号「192」という付箋が貼

られている。また合綴されている断簡絵尽の表紙裏に、「昭和十三年八月三日」「登録12250」という判が押されている。中央図書館の図書カードをめくってみると、「富十郎番付」と題する史料が、昭和十三年八月三日に「登録12250」、分類番号「192」で図書館の図書として登録されていることが確認できる。このことから「中村富十郎在界当時芝居番付外一種」は昭和十三年八月三日に登録番号「12250」、「古文書分類表」による分類番号「192」で中央図書館の図書として登録されたものといえる。その後、昭和十六年（一九四一）三月末の『堺市立図書館図書目録』下（第七分冊三）をみると、（俳優）の部に「151」でも分類されている。

さて、図書カードには「一冊二枚」と記載されている。これは冊子状となっている断簡絵尽一冊、役割番付二枚から構成されているということの意味する。つまり、昭和十三年八月三日段階で、断簡絵尽と役割番付二枚は現状の合綴冊子体となっており、また「中村富十郎在界当時芝居番付外一種」という表題が付けられていたことが判明する。すなわち、合綴されたのは昭和十三年九月三日以降、昭和十三年八月三日までの約十年の間といえる。さらに、合綴時期を絞り込んでみると、つぎのような時期が考えられる。

「旧市史編集部」が購入してから、中央図書館に引き継がれるまで。すなわち、昭和十三年九月三日から同五年の間。

この昭和十三年九月三日から同五年という期間に「旧市史編集部」の手によって、購入した役割番付と何らかのかたちで「旧市史編集部」に入った断簡絵尽を合綴冊子体としたのではないであろうか。合綴した理由は、『堺市史』第三巻編纂の史料として、活用しやすくするため冊子体としたのではないかと考えられる。おそらく、この時期に役割番付を裏打ちしたりしたのである<sup>(4)</sup>。しかし、この合綴された絵尽は寛保元年二月、大坂大西芝居での興行「女人堂きさらぎ桜」のものであり、絵尽に記される富十郎とは初代中村富十郎のことである。すなわち「旧市史編集部」は明らかに、この絵尽にある初代中村富十郎を二代目富十郎と誤解し、「富十郎番付」に合綴したものである。この誤解が生じた理由は、

「この絵尽のあとで綴じ直した別の裏表紙見返しに「天保十四年」とあること、「女人堂きさらぎ桜」が堺の乳守郭を舞台にしていること、富十郎が出勤しているが、その興行がいつ行われたのか調査が行き届かなかったこと、などが考えられる。また同時に「旧市史編集部」がこの絵尽を収集した段階で、すでに先述したようなかたちで手が加えられて、別表紙で綴じ直し冊子体となっていたものと考えられる。

さてその後、「富十郎番付」は中央図書館によって所蔵されたが、昭和十六年（一九六一）以降、中央図書館では「旧市史編集部」より引き継いだ様々な市中関係の文書群を、一所にまとまって伝来していないことから『個別文書』と題して一括し保管した。「富十郎番付」もこの『個別文書』に一括された。そして平成二十二年の中央図書館古文書整理事業のなかで、『個別文書』は四つの文書群に独立され新たな史料名が付された。「富十郎番付」も「堺芝居番付」と改称され、現在に至っている。

それではつぎに、これらの番付から汲み取れる情報を整理・検討してみたい。

### 三 「富十郎番付」と記載情報

#### 1 同一興行における異版番付

「富十郎番付」に合綴されている役割番付二枚のうち、同一興行の役割番付で異版があるのが二種存在している。まず、この同一興行における異版の役割番付について検討してみたい。

仮番号1924と1925はともに「巳の三月」の興行であり、弘化二年（一八四五）三月新地南芝居における歌舞伎芝居興行の役割番付である。二枚の役割番付ともに出動している役者、地方、鳴物ともに同一であるが、狂

言が差し入れられている。内容をみると、19 2 4は「けいせい浜真砂」のみの興行となっている。一方、19 2 5は「けいせい浜真砂」を前狂言とし、切狂言「芦屋道満大内鑑」、道行「恩愛乃乱菊」を差し入れている。これは当初、「けいせい浜真砂」のみの興行、あるいは興行予定であったのが、のちに切狂言「芦屋道満大内鑑」、道行「恩愛乃乱菊」を差し入れて興行するようになったため、二種の役割番付となったものと考えられる。

つぎに仮番号19 2 9と19 2 10の役割番付を検討してみた。この興行は弘化二年八月新地南芝居における役割番付である。

19 2 9の狂言立ては前狂言「払暁浦朝霧 入舟三艘」、大切狂言「切狂言「隅田春妓女客性 上中下」の順となっている。特に大切「富在原系図」は、外題の下に、「亡兄中村玉助追善中村富十郎相勤申候」とあり、亡き三代目中村歌右衛門追善の狂言となっている。前狂言のつぎに大切狂言、そして後狂言となっており、狂言の順序が逆となっている。19 2 10の狂言立てをみると、前狂言「払暁浦朝霧 入舟三艘」、後狂言「熊坂長範物見松 旅籠やの段」、切狂言「隅田春妓女客性 上中下」という順序となっている。19 2 9は前狂言・大切狂言・切狂言という順序であり、19 2 10は前狂言・後狂言・切狂言という順序となっていることから、もともとは前狂言「払暁浦朝霧 入舟三艘」、後狂言「熊坂長範物見松 旅籠やの段」、切狂言「隅田春妓女客性 上中下」という順序で興行していたものが、何かしらの理由により、後狂言「熊坂長範物見松 旅籠やの段」を「富在原系図」に差し換え、後狂言の部分に大切狂言「富在原系図」をいれたと考えられる。したがって、本来は19 2 10が先行する興行であったといえる。

役者に目を転じると、熊坂長範役の嵐花播は差し替えとなった興行には出勤していない。そのかわりに中村芝鶴が出勤し、大切狂言「富在原系図」の跡見乙人役と嵐花播が熊坂長範役以外で担っていた網丁右兵衛亮、小割伝内、桜ノ由兵衛役を担っている。このため、おそらく、嵐花播に関連する何かしらの理由によって、嵐花播が退座し、そのために

狂言が差し替えられ、差し替えた「富在原系図」を「亡兄中村玉助追善」として上演したものと考えられる。

## 2 芝居茶屋に関する情報

堺の芝居茶屋に関しては、かつて拙稿において整理・検討したが、<sup>(5)</sup>「富十郎番付」より新知見を得ることができたので、ここで拙稿における成果を踏まえたくうえで検証してみたい。

「富十郎番付」に合綴されている役割番付のうち、新地にあった芝居茶屋「浜田屋」の印が押されたものが一六枚存在する。この浜田屋はつぎの史料よりも、その存在を確認することができる新地南北西芝居の芝居茶屋である。

### 【史料1】

(前略) 此後、目古地善右衛門殿北芝居ヲ横町へ引、新芝居瓦ぶきにて建候、両芝居ならひ、前茶屋も追々建申候、其節前茶屋

松島屋  
浜田屋  
大勝  
ならや  
杉本屋<sup>(6)</sup>

右の史料は新地世話方であった松原武次郎が慶応三年(一八六七)以降、『松原武次郎成就扣』と題し、自ら関わった新地の仕事などを年代記風にまとめたものである。後年にまとめられたことは考慮せねばならないが、彼自身、新地の芝居小屋誘致などに関わっているため、その内容は評価できるものといえる。ここでは新地南北西芝居が成立したお

り、その芝居茶屋として五軒の芝居茶屋の名があげられている。「このうち」「浜田屋」とあるのが、役割番付一六枚に印が押されている芝居茶屋「浜田屋」のことである。

「富十郎番付」において、芝居茶屋「浜田屋」の印は三種類確認できる。すなわち一種は【図一】(仮番号19 2 5など)であり、ほかの芝居番付所蔵機関が所蔵される堺の役割番付でも確認できるものである。「浜田屋」の印としてはポピュラーな印であったと考えられる。もう一種は【図二】(仮番号19 2 18)の印である。【図一】(仮番号19 2 18)の印と比べると大ぶりの印である。この【図二】の印は、いまのところ他の芝居番付所蔵機関の堺の役割番付では確認できず、そのため貴重な事例といえる。そして最後の一種が【図三】(仮番号19 2 6)である。この印をみると「浜田屋改ひな菊」という表記となっている。この印が押されている役割番付は、弘化二年五月新地南芝居における歌舞伎興行のものである。このことから芝居茶屋浜田屋は、弘化二年五月に屋号を浜田屋から「ひな菊」に変更したことが判明する。ただし、これ以降も浜田屋の印は確認できるため、弘化二年五月に「ひな菊」と屋号を改名したものの、また、もとの浜田屋に屋号を戻したか、あるいは浜田屋・ひな菊の両屋号を併用したのではないかと考えられる。

また浜田屋のほかに「森平屋」【図四】(仮番号19 2 2、同19 2 3)、「新地森平屋」【図五】(仮番号19 2 21)と墨書する番付を三枚確認することができる。その内訳は「森平屋」と墨書する番付が二枚、「新地森平屋」が一枚である。この森平屋も新地に存在した芝居茶屋と考えられる。森平屋はこれまで確認されていない芝居茶屋であり、その意味において貴重な事例といえよう。

さて、合綴されている役割番付二二枚のうち一六枚に芝居茶屋「浜田屋」の印が押され、ほかに三枚の番付に「森平屋」あるいは「新地森平屋」と墨書されている。二二枚のうち、一九枚に芝居茶屋の印が押され、あるいは墨書がなされている。このことは、この役割番付二二枚が、茶屋かかりの見物のものであったこと、特に浜田屋かかりの見物のも



図1



図2

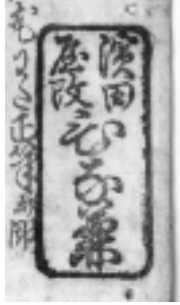


図3



図4-1



図4-2



図5

のであったことを示唆するものといえよう。したがって、この役割番付二枚は出所がばらばらのものが集積して二枚となったのではなく、二二枚が一所にまとまって伝来したものと考えられる。おそらく、もともと浜田屋かかりの見物のものであったものではないかと考えられる。それを「旧市史編纂部」が昭和三年九月三日に個人から、あるいは古書店などから購入したものと考えられる。

とすると、注目できるのが役割番付二二枚のうち、唯一、堺の芝居番付ではない弘化四年（一八四七）三月大坂中之芝居の役割番付である。この番付には「大小路浜 大和権市右衛門様」という墨書がなされている。「大小路浜」とは、堺の大小路浜をさすものと考えられるので、この大和権市右衛門とは、堺の大小路浜に住まいした堺町人であると推考される。先述したように、「富十郎番付」の役割番付二枚は出所がばらばらの役割番付が二枚として集積したのではなく、一所にまとまって伝来したものと考えられる。そのため、堺の大小路浜に住まいしたと考えられる、この大和権市右衛門が役割番付二二枚のもともとの所有者であった可能性は高いといえよう。

### 3 俄師による興行について

文政二年（一八二九）板「左海市中玉つくし」（大阪府立中之島図書館蔵『保古帳』）をみると、「ニワカ」として「芋長」の名がみえる<sup>(7)</sup>。文政二年の段階で、堺には俄に長じた堺町人が在住していたことが確認できよう。堺は曾我迺家五郎・十郎を輩出した都市であるが、近世における堺の俄については、これまでほとんど言及されていない。「富十郎番付」に合綴された役割番付のうち、大坂の俄師による興行の番付と考えられる役割番付が二枚存在する。そこでつぎに、この二枚の番付について検討してみたい。

まず一枚は仮番号19 2 8、弘化三年四月「堺南嶋芝居」における興行の番付である。座本は朝井五蝶で名代は不明である。「堺南嶋芝居」とあり、芝居小屋名は具体的には不明であるが、芝居茶屋「浜田屋」の印があるため、新地にあった新地南芝居、新地北芝居のうちのいずれかであると考えられる。内容をみると、狂言は「弥二郎兵衛喜多八 けいせい膝栗毛五十三取続 江戸よりいせまで」・「平井権八曲輪通 ずかもりの段」・「箱根靈験鬨討 阿弥陀寺のだん」・「生写朝顔話 宿屋のだん」・「伊賀越道中双六 岡崎のだん」・「勢州阿漕浦 平治住屋の段」・「伊勢音頭恋寝剣 十人切のだん」であった。出演は朝井勝代・同南玉・同市丸・同梅清・同蝶蝶・同歌蝶・同米丸・同五蝶・同鬼勇・同中井・同首琴・同新蝶で、頭取が朝井与三郎である。

二枚目は仮番号19 2 16、「末の十一月」の「堺芝居」における興行の番付である。干支より弘化四年十一月の興行と推考される。興行場所はこの番付にも芝居茶屋「浜田屋」の印があるため、新地にあった新地南芝居、新地北芝居のうちのいずれかであると考えられる。板元の名として「本清」の名を確認できる。狂言は前狂言「けいせい膝栗毛 つづき五段」・中狂言「義経千本桜 三だん目」・後狂言「妹背山女庭訓 三だん目」・切狂言「壇浦兜軍記 琴責ノ段」を上演している。出演は谷村南玉・同市丸・同金玉・同米丸・同梅勢・同仲井・同三貴・同新蝶で、頭取は朝井与三郎であった。

両興行の出演者を照会すると、出演はそれぞれ朝井姓、谷村姓であるが、両興行に共通して名のある南玉・市丸・米丸・中井・新蝶、そして頭取の与三郎は、それぞれ同一人物であると考えられる。

天保十一年（一八四〇）板「浪花諸芸玉尽くし」（大阪府立中之島図書館蔵『保古帳』）をみると、「ニワカ」として「淀川」「南玉」「新蝶」の名があがっている<sup>(8)</sup>。また翌同二年（一八四一）板「浪花諸芸玉尽くし」（大阪府立中之島図書館蔵『保古帳』）にも、「ニワカ」として「米丸」「三貴」の名がみえる<sup>(9)</sup>。また、安政四年（一八五七）二月に大坂市中の二二か所の宮地芝居が再興され、それにあわせ三井寺は説教讃語名代を二二か所の宮地芝居に下付した。そ



の後、かたちだけ三井寺より説教者の免状をもらう歌舞伎役者や俄師がいた。安政五年（一八五八）八月に「俄師」の新蝶・三貴・了蝶・蝶貴・金玉・南玉・市丸らが免状を下付されている。さらに、安政五年二月十九日には歌蝶が免状を下付されている。<sup>10)</sup>

両「玉尽くし」に「ニワカノ」として名のある南玉・新蝶・米丸、そして安政五年八月に三井寺より形だけ説教者の免状をもらった新蝶・南玉・市丸は、大坂の俄師と考えられる。そのため、これらの俄師と両役割番付に名がみえる南玉・新蝶・米丸とは俄師として同一人物であるといえる。したがって、両役割番付は堺における俄師による俄狂言の役割番付であると考えられる。

この役割番付では、新蝶・南玉・市丸ら俄師は、朝井・谷村姓をそれぞれ名乗っている。このほかに安政二年三月、堺新地南芝居の役割番付にも、これらの俄師が浅井・市川姓で出勤している。これらの姓名は、歌舞伎役者の家の姓でもあるので、俄師が興行を行なうにあたって、興行の名目を歌舞伎芝居とし、そのために朝井（浅井）・谷村姓、あるいは市川姓を用いたのではないかと考えられる。ただ、逆に俄師が歌舞伎芝居そのものを上演するために、それぞれ歌舞伎役者の家の姓を名乗ったとも考えられる。近世における堺の俄狂言興行については、今後の課題とし、後考をまちたい。

ところで、仮番号19 2 16には板元として「本清」が確認できることは先述した。これまで堺の芸能興行における芝居番付の板元・板下に関する考察は皆無である。堺の芝居番付の板元・板下を考察するにあたっては、いま問題としている「富十郎番付」だけではなく、各芝居番付所蔵機関が所蔵される堺の芝居番付を含めて考察する必要がある。ただ本稿は中央図書館が所蔵される「富十郎番付」を分析することを目的としているため、ここでは「富十郎番付」を軸に整理・検討してみたい。

#### 4 板元・板下にこいて

そもそも、芝居番付においては板元・板下は辻番付（顔見世番付）には記載するが、基本的には役割番付には記載しないのが通例である。ただ天保六年（一八三五）板の役者評判記『役者現金店』をみると、

【史料2】

役者極り附は判下を書も又判木をほらせるにも秘してみだりに人に見せず かやうの事を聞んには松や町通二つ井戸南へ入東がはにて和田正兵衛と申判下書あり 浪花の芝居は勿論堺兵庫又旅行番附の判下猶又近年は京四条へ大芝居行度に此和田氏にて判下を認めさせ行なれば、

とあって、天保六年の時期の大坂における番付板行に関して、つぎのようなことが判明する。

大坂の辻番付（顔見世番付）の板下を、大坂の板下であった和田正が担っていたこと。

その和田正とは大坂松屋町通二つ井戸南へ入東側に住まいした和田正兵衛であったこと。

大坂の板下和田正兵衛はこの時期、堺や兵庫の芝居や地方興行の番付の板下も担当していたこと。

「富十郎番付」に合綴されている役割番付二二枚は、天保六年以降の役割番付であるので、その板元・板下を確認してみたい。巻末【目録】にあるように、板元が記されているのは、先述した仮番号19 2 16の俄狂言番付、仮番号19 2 21の年月日不明新地南芝居の人形浄瑠璃の役割番付であり、ともに「本清」と記されている。この本清は大坂の板元と考えられるが、いまのところ詳細は不明である。

板下についてみると、「浪花 和田正筆並彫」、あるいは「わた正筆并彫」と記されている役割番付が二二枚確認できる。この「和田正」とは言うまでもなく、先述した「大坂松屋町通二つ井戸南へ入東側」に住まいした和田正兵衛のことである。先にみた史料にあるように、堺では天保六年以降、大坂の板下である和田正兵衛が、堺の芝居の役割

番付の板下を担当していたといえる。和田正兵衛については、和田正筆の京都板歌舞伎番付について、荻田清氏が詳細に考察されている<sup>12)</sup>。そのなかで荻田氏は、右の史料をあげ、少なくとも和田正兵衛がこの時期、大坂の芝居の板下を担当していたことを窺える、と指摘されている。また同時に、荻田氏は和田正兵衛が大坂の芝居の辻番付(顔見世番付)の板下を担当しているが、これを「筆耕者名を記さない役割番付にまで拡大解釈してよいものかどうか」とも指摘されている<sup>13)</sup>。大坂の役割番付については荻田氏の指摘どおり後考を待たねばならないが、少なくとも堺の役割番付については、天保六年以降、和田正兵衛が役割番付の板下を担当していたものといえる。

堺の歌舞伎や人形浄瑠璃興行は京坂、特に大坂に大きく依存していた。このことは役者や大夫などの出勤状況からも判明するが、いまみたように、役割番付の板行という点からも「大坂興行界」に包含されていたことを確認することができる<sup>14)</sup>。

## おわりに

以上、中央図書館が所蔵されている芝居番付、すなわち「富十郎番付」(現在は「堺芝居番付」と題し所管)について、その出所や来歴、そしてその特色などについて整理・検討してきた。

「富十郎番付」に合綴されている断簡絵巻と役割番付は、もともと「旧市史編集部」が購入、あるいは何らかの経緯で所有したものを「旧市史編集部」の手によって合綴され、上記の表題がつけられたものといえる。

その特色については同一興行の異版番付や俄狂言、芝居茶屋、板元・板下といった問題点について、整理し検討を加えた。その内容については本稿の考察に譲りたい。ただ多くの新知見を見出すことはできたものといえる。

今後は、本稿の成果を、各芝居番付所蔵機関が所蔵する堺の芝居番付と照合し考察することによって、堺の芝居番付について包括的な考察を進めていく必要がある。また中央図書館が「富十郎番付」以外で所蔵されている近世演劇関係の一枚摺や芸能関係史料についても考察を進めていきたい。

## 註

- (1)「堺研究に関する研究文献については、吉田豊「中世近世初期堺史の研究文献一覧」、『堺市博物館報』二二号、同「中世近(平成一〇～二二年度世初期堺史の研究文献一覧 その2)、『堺市博物館報』二二号(を参照のこと)。
- (2)「堺市中央図書館所蔵古文書調査概要」、『堺市中央図書館 郷土資料担当執筆分』、『堺研究』三〇号)。
- (3)早稲田大学坪内博士記念演劇博物館や阪急学園池田文庫などが所蔵されている芝居番付を整理し目録化している。また芝居番付に関する研究として、荻田清『上方板歌舞伎関係一枚摺考』(清文堂、一九九九)、同「歌舞伎の出版物」(三)一枚摺』(『岩波講座 歌舞伎・文楽』第四巻、岩波書店、一九九八)、同「和田正筆京都板歌舞伎番付」、『混沌』二四号)。
- 赤間亮「歌舞伎の出版物」(一) 上演出版物』、『岩波講座 歌舞伎・文楽』第四巻、岩波書店、一九九八)、同「歌舞伎の出版物」(二) 劇書の世界』(同右)、同「歌舞伎の出版物」(四) 歌舞伎の演劇書』(同右)、同「歌舞伎の出版物を読む江戸の上演システム」、『東海道四谷怪談のことなど』、『江戸文学』一五号、一九九五年大阪市立博物館展示図録『芝居おもちゃ 絵の華麗な世界―近世庶民と歌舞伎文化』などをあげることができる。

(4)「旧市史編集部」が収集した史料に手を加え保管した例として、「耳家文書」をあげることができる。この史料は耳氏より「旧市史編集部」に寄贈されたものである。この史料は昭和三年に「旧市史編集部」の手により時系列に整理され三巻に表装されている。なお、『耳家文書』については前掲注「二」『堺耳家文書』上田歩美氏執筆分を参照されたい。

(5)「拙稿」『興行地「堺と観客」』、『芸能史研究』一四四号)。また同じく拙稿「興行地「堺と芝居小屋」』、『鷹陵史学』二二五号)。

も参照していただきたい。

- (6) 『松原武次郎成就扣』、『堺市史』第五卷 資料編二、六六三～六六四頁。
- (7)(8)(9) これらの史料については、荻田清氏のご教示を得た。謹んで謝意を表します。
- (10) 室木弥太郎・阪口弘之編『関蝉丸神社文書』(和泉書院、一九八七)、四七〇～四七一頁。
- (11) 大阪府立中之島図書館所蔵。
- (12) 前掲注、荻田氏「和正筆京都板歌舞伎番付」、『混沌』二四号。
- (13) 同右。

## 【堺市立中央図書館所蔵芝居番付】「富十郎番付」目録【

### 凡例

仮番号(番付の種類) 年月日 興行場所 芸能種別 座本・名代 (座)(名)とそれぞれ略 演目前狂言(前)・  
中狂言・後狂言・切狂言・大切狂言・道行 (前)(中)(後)(切)(大切)(道)とそれぞれ略 板元・板下 (元)  
(下)とそれぞれ略 備考

1921 (絵尽)

寛保01・02・19

大坂大西芝居

歌舞伎

(座) 中村富十郎

女人堂きさらぎ桜

断簡の絵尽

1922 (役割番付)

天保15・08・14

新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富治郎

(前) 女非人敵打 (中) 妹背山女庭訓 (道) 恋芋環

(下) 和田正

14日初日は早稲田大学演劇博物館蔵役割番付と照合より。

「森平屋」と記す墨書あり。

1923 (役割番付)

天保15・09

新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富治郎

(前) 和田合戦女舞鶴 (切) 契情筑紫鼓

(下) 和多正

「森平屋」と記す墨書あり。

1924 (役割番付)

弘化02・03

新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富治郎

(前) けいせい浜真砂

(下) 浪花わた正

「浜田屋」の印あり。

1925 (役割番付)  
弘化02・03

新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富治郎

(前) けいせい浜真砂 (切) 芦屋道満大内鑑 (道) 恩愛  
乃乱菊

(下) 浪花わた正

「浜田屋」の印あり。

1926 (役割番付)

弘化02・05

新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 新つすゆき物語 (切) 恋飛脚大和往来 (道) 恋女  
房染分手綱

(下) 浪花わた正

「浜田屋改 ひな菊」の印あり。

1927 (役割番付)  
弘化02・10

しんち南芝居

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 紅風いろは文庫 (切) 鏡山旧錦絵

(下) 浪花和多正

「浜田屋」の印あり。

1928 (役割番付)

弘化03・04

堺南島芝居 (新地南芝居)

俄狂言

(座) 朝井五蝶

けいせい膝栗毛五十三駅続 平井権八曲輪通 箱根権現蟹仇  
討 生写朝顔語 伊賀越道中双六 勢州阿漕浦 伊勢音頭  
恋寝剣

興行場所は新地南芝居と推定。「浜田屋」の印あり。

1929 (役割番付)

弘化03・08

堺南芝居 (新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 払暁浦朝霧 (大切) 富在原系図 (切) 隅田春妓女  
客性

(下) 浪花和多正

興行場所は新地南芝居と推定。

19210 (役割番付)

弘化03・08

堺南芝居 (新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 払暁浦朝霧 (後) 熊坂長範物見松 (切) 隅田春妓

女客性

(下) 浪花和多正

興行場所は新地南芝居と推定。判読不能な印あり。

19211 (役割番付)

弘化03・10

堺南芝居 (新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 敵討敵流島 (切) 染模様妹背門松

(下) 浪花わた正

興行場所は新地南芝居と推定。「浜田屋」の印あり。

19212 (役割番付)

弘化04・08

堺南芝居 (新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村とも江

(前) 伊賀越乗掛合羽 (切) 義経千本桜

興行場所は新地南芝居と推定。「浜田屋」の印あり。

19213 (役割番付)

弘化04・正

堺南芝居(新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村ともゑ

天満宮愛梅桜松

(下) 浪花和田正

興行場所は新地南芝居と推定。

19214 (役割番付)

弘化04・05

堺南芝居(新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村ともゑ

(前) 菅原伝授手習鑑 (後) 傾城反魂香

興行場所は新地南芝居と推定。「浜田屋」の印あり。

19215 (役割番付)

弘化04・09

堺南芝居(新地南芝居)

歌舞伎

(座) 中村ともゑ

(前) 日本第一和布刈苅神事(切) 鬪恋湊

(下) わた正

興行場所は新地南芝居と推定。「浜田屋」の印あり。

19216 (役割番付)

弘化04・11

堺芝居

俄狂言

(座) 沢村松之助

(前) けいせい膝栗毛(中) 義経千本桜(後) 妹背山女庭訓

(切) 壇浦兜軍記

(元) 本清

興行場所は新地南芝居・新地北芝居のいずれか。「浜田屋」の印あり。

19217 (役割番付)

嘉永04・03

大坂中之芝居

歌舞伎

(座) 中村駒之助

いろは仮名四十七訓

(元) 内茶屋

「大小路浜 大和権市右衛門」と記す墨書あり。

19218 (役割番付)

嘉永03・4上旬

堺新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富右衛門(名) 粉川屋喜助

(前) 一谷嫩軍記(中) 恋伝授文武陣立(切) 吉原細見

図

「浜田屋」の印あり。

19219 (役割番付)

嘉永03・08

堺南芝居

歌舞伎

(座) 中村富右衛門(名) 粉川屋喜助

(前) いろは歌普桜花(後) 木下陰狭間合戦

「浜田屋」の印あり。新地南芝居・新地北芝居のいずれか。

19220 (役割番付)

弘化03・07

堺新地北芝居

歌舞伎

(座) 坂東荒太郎

(前) 敵討崇禪寺馬場(切) 国性爺合戦 (大切) 松朝霞色粉

年月日・興行場所は池田文庫蔵役割番付との照合より。「浜田屋」の印あり。

19 2 21 (役割番付)

天保15・04

堺新地南芝居

歌舞伎

(座) 中村富次郎

(前) 先代萩若栄(切) 傲花傾城道成寺

(下) 和多正

「新地 森平屋」と記す墨書あり。

19 2 22 (役割番付)

弘化03・03

堺新地南芝居

人形浄瑠璃

(大夫) 竹本呂大夫 (名) 藤田屋宇八

出世太平記 勢州阿漕浦 娘景清八島日記 天網島紙屋治兵衛

(元) 浪花 本せ

「浜田屋」の印あり。

19 2 23 (役割番付)

弘化04・08

堺新地北芝居

人形浄瑠璃

(大夫) 豊竹若大夫 (名) 和泉屋鹿之助

妹背山女庭訓 摂州橋供養 和田合戦 芦屋道満大内鑑

「浜田屋」の印あり。